遠藤周作の『おバカさん』とドストエフスキーの「おばかさん」と

――「永遠の奇蹟」としての「無条件に美しい人間像」をめぐって――

*浅田　隆

遠藤周作は「ストレート・ボールを投げる投手が立派な投手で、ナックル・ボールを投げる投手はだめだとはだれも思わない。ユーモア文学は人間や人生の真実をナックル・ボールで語ろうとする文学」（「ユーモア文学のすすめ」『朝日新聞』'64・7・7）だと言う。しかしこの『おバカさん』には、変化球が変化しそこなってワイルド・ピッチになったような部分もないわけではない。例えば作中の時間の流れはかなりずさんで、「三月中旬頃」に、届いた手紙を読みながら「四月一日まで、まだ二、三日はあるし」とつぶやいてみたり、半月前の出来ごとを「一か月前」と回想させてもいる。時間に関するミスばかりでなく、「水の中に落ち」たはずのピストルを「ぬれた地面の上」から拾い上げさせてもいる。こうしたミスは連載（『朝日新聞』'59・3・26～8・15）時に頻出し、後に中央公論社から出版（'59・10）した折補正されたようだが、それでも辻褄が合っていない。これは、この作品が作者にとって最初の新聞小説だったこともあり、また作中の時間と執筆中の現実の時間とが混乱してしまったためとも考えられる。

ところで、このような近代リアリズムの基本を踏み抜いてしまったような作品であるにもかかわらず、この作品は我々が遠藤を考える上で重要な意味をはらんでいると言える。剽軽な題が示すように、作品のリズムはきわめて軽やかだ。主として純文学系の雑誌への執筆が中心だった彼にとって、広範で多様な読者対象が予想される新聞小説はかなりの「戸惑い」を与えたらしく、結局対象紙に中高校生向けの小説がないことに着目し、主として「これらの世代」を目標に執筆したと言っている（「新聞小説について」『東京新聞』'60・6・25、26）。作品から感じられる剽軽なリズムはこの辺りに起因しようが、これこそ、今日の雲谷斎狐狸庵山人の誕生でもあった。

しかし、連載が開始されるや彼の意図を越えて、広範な読者層からの反応があったらしい。それはこの作品がユーモラスな饒舌の背後に、読者の心に深く訴えかける何かを持ち得ていたためでもあろう。彼は連載開始に先き立つ「作者のことば」（『朝日新聞』'59・3・23）の中で、

> 哀しいが、明るい小説を書いてみたいと思います。まず、主人公はぼくが平生からあこがれているような人物です。その主人公を作者はあえておバカさん――そう呼びます。
>
> （中略）しかし「おバカさん」とはバカという意味ではありません。母親がいたずら小僧に「オバカサン」そうささやく時のあのやさしい愛情を作者はこの小説の主人公に抱いているのである。（後略）

と語っているように、また作中人物日垣隆盛に「あんな人間がまだ存

*国文学研究室（昭和56年9月22日受理）

在することを思っただけで……おれはなんだか近ごろ気が晴れてきたよ」「ガストンを見捨てるってことは、なんだか自分の心にある一番よいものを見捨てることになる」と言わせてもいるように、作者にとって肯定的人物であることがまず確認できる。

主人公ガストン・ボナパルトは翌年の『ヘチマくん』（『河北新報』他'60・6・2～12・22）の主人公豊富鮒吉が秀吉の子孫であるように、英雄ナポレオン・ボナパルトの子孫として登場する。あまりにも奇矯と言えば言えようが、この設定によって作品の娯楽性を保障するとともに、伝統的なリアリズム小説の地平から半歩ばかりの離陸に成功したと言える（この半歩の離陸こそ、ドストエフスキーが『白痴』の主人公ムィシュキン公爵に癲癇症発作による痴呆症と純粋培養された知性を描き込んだと同様に、重要な設定である）。

何処にでもあるような市井の家庭（日垣家）の中に突然降り立つフランス青年ガストンは、ユーモア小説に相応しい形で登場する。ナポレオンの末裔ガストンはヴェトナム号四等船客として横浜に到着し、船底から現われる。彼はあのナポレオンとは全く重なり得ないような、ノロマで容貌魁偉、ただしたくましさは全くない青年だった。このようなガストンについて、隆盛の妹で流行の最先端を行くような当世風のチャッカリ娘巴絵は初対面の折「顔だけではなく鼻も長い。そして歯ぐきをニャッと見せて笑った大口までが……馬の面にそっくり」であることについて、「知性のひらめきなど一片だにないこの間抜け顔」と感じ、風貌や「不器用な動作」やギゴチない日本語について「こみあげて来る笑いを必死で押えよう」とする一方で「ヤラレタという意識が電光のように心にひらめく」のである。さらに巴絵は、フランス青年であるということに抱いていた「バラ色の空想まですっかり粉みじんにされ」「できればガストンをどこかに捨ててしまいた」く思う。ガストンは冒頭から巴絵にとって余計者だ。

このようにして日垣家に転げ込んだガストンではあったが、彼は殆んどお金を持っているように見えず、所持品も古ぼけた「信玄袋のようなサック」一つだけにすぎず、さりとて隆盛達をあてこんでの来日でもなさそうである。到着後の一週間「隆盛の書き込んでやった東京見物の地図を手に持って」ガストンは出かけるが「銀座や丸の内は素通りして、どこかの寺の境内で一日中、子供とハトを見物して」暮らしているらしい無類の子供好き。彼は「コドモさんとハトさん、たくさん、たくさん見たね」と言う。そればかりか、到着の日のうちに彼はセキをする老野犬を拾って来、「イヌさん、みなさんのお友だち、私と同じお友達」と言い出す始末。このようなガストンについて「顔が馬のようで動作が緩慢なのは天性・神の与えたものだから仕方あるまいが、しゃべることと、なすことをジッと見ていると、まるで幼児のような精神年令」（以上傍点筆者）であり、巴絵は「バカなのか利口なのか」「本当はバカな顔をして……何かたくらんでるんじゃないかしら」（傍点筆者）と感じたりもしているのである。

いささか飛躍するようではあるが、筆者はガストン像を思うとき、右の傍点を打った部分などのために『白痴』のムイシュキン公爵像への連想を禁じ得ないのであるが、もう少しガストンについて見ておきたい。

隆盛は「ふしぎな男だよ。ありゃ。決してなみの旅行者や観光客じゃないぜ。早い話、あの男の興味をひくのは東京タワーでも鎌倉の大仏でもないんだからねえ。（中略）おれには興味シンシンだが、さっぱりわからん」と言う。日本に来た目的はわからないなりに、隆盛は、ガストンが「普通以上の覚悟をしているらしい」のを感じ取る唯一の

理解者なのだ。

一方、隆盛の家をひょんなことから飛び出したガストンは「人間を信じたかった。この地上の人間がみなナポレオンのように利口で、強い人ばかりではないと思った。この地上が、利口で強い人のためだけにあるのではないと思った」「弱くて、悲しい者にも何か生きがいのある生き方ができないものだろうか」と考える。また街娼サー公を救ったことで所謂ホテルを深夜に追い出されるが、その折にも「自分のような愚かな男に他人を助けることは、なんとむつかしい大それたことだろう」と考えてもいるのだ。そして、さっき助けたばかりのサー公に逆に助けられ、街娼達の仲間に紹介された折『『金ないの、あんた』ガストンはポケットから全財産を見せた」とあるように、彼は初対面のイカガワシゲな夜の女たちに、わずかであるとはいえ自分の全財産を示すのである。

どんな人間も疑うまい。信じよう。だまされても信じよう――、人間を信じる仕事――愚かなガストンが自分に課した修業の第一歩がこれだった。

巴絵が「善人とかお人好しとかはこの生き馬の目をぬく今の社会ではバカに通ずる」と考えるように、彼を取りまく社会は「だまされても信じよう。（中略）今の世の中で一番大切なことは、人間を信じる仕事」といった彼の思いなどを省る心の余裕を失った、殺伐たる社会なのだ。

サー公達に紹介された蜩亭老人は、日本に今失われているものは「信ずるということ」だと言う。「真心というものを持っとらんのは、あんた、この日本で……政治家とインテリと呼ばれる人たちですたい」「真心、……あんた、この言葉を聞いても今の若い日本人は感動もせん。そんなもんは世間をわたるのに通用せん無用なものと思うとる」「貧しいのは物じゃない。心の貧しい国が今の日本じゃ」と語る。つまり、「相手の善意を認めようとも信じようともしない文明とか知識とかいうものを、ガストンは遠い海のむこうに捨てて」まで日本に渡って来たのだが、日本の現状は「真心」を喪失した社会なのである。ここでもガストンは日本社会の現実から半歩ばかり浮き上がってしまったと言わねばなるまい。しかし彼は不幸な人や苦しむ「人間の為になにかがしたかった」のだ。このようなガストンにとって、新興暴力団星野組の殺し屋遠藤との出会いは、ある意味で運命的なものだったと言える。

さて、さきにムイシュキン公爵を連想せざるを得ないと言ったが、ドストエフスキーはその姪ソフィア・イワーノブナに宛てて、『白痴』の意図をつぎのように書き送っている（新潮文庫『白痴』(下)「解説」収載）。

この長編の主要な意図は無条件に美しい人間を描くことです。これ以上に困難なことは、この世にありません。（中略）美しきものは理想ではありますが、この理想はわが国のものも、文明ヨーロッパのものも、まだまだ実現されておりません。この世にただひとり無条件に美しい人物がおります――それはキリストです。したがって、この無限に美しい人物の出現は、もういうまでもなく、永遠の奇蹟なのです。（中略）キリスト教文学にあらわれた美しい人びとのなかで、最も完成されたものはドン・キホーテです。しかし彼が美しいのは、それと同時に彼が滑稽であるためにほかなりません。

『白痴』がドストエフスキーにとって当代のキリスト創出の試みであったとされる所以である。彼はさらに続けて「他人から嘲笑されながら、自分の価値を知らない美しきものにたいする憐憫が表現されているので、読者の内部にも同情が生れるのです。この同情を喚起させる

術のなかにユーモアの秘密があるのです」と分析し、「私の作品にはそのようなものがまったく欠けています」と記している。つまり彼は、『ドン・キホーテ』の中に感じられるユーモアを取り去る形で「無条件に美しい人間」を造形しようとしたらしいのである。しかしベルグソンが「放心行為は、ただ単に現実からの不在といったものではない。この放心行為は、その人間がある特定の環境に現実に存在していることによって説明される」と「ドン・キホーテ」の滑稽を説明したような（「笑い」『ベルグソン全集』第三巻　鈴木力衛訳　'65・10　白水社）日常的現実社会の支配的論理とは異なった論理に立っているという点では、ムイシュキン公爵も同じなのである。そしてこのキホーテと公爵の類似性以上の近親関係をガストンはムイシュキン公爵に持っているようである。

ガストン登場の場面は、ロゴージンと向かい合ってペテルブルグ行きの列車に乗っている公爵を想起させる。ムイシュキンはスイスのシュネイデル博士のもとに、およそ五年ほど、癲癇症治療のために留っていたが、事情でロシアに帰国することになった。が、ロシアに身寄りがあるわけでもない。彼は「十一月のロシアの湿っぽい夜の冷気を、思う存分、その震える背中で耐えしのばねばならない」ほどにみすぼらしい身なりで「色のさめた古い絹地の包み」を一つ持っているのが全財産なのだ。「スイスの医者がなけなしの金をはたいてここまでの旅費を払ってくれた」とは言え「いまは手もとに幾コペイカも残って」はいない。そんな公爵は、車中でたまたま向かい合ったロゴージンに自己の閲歴と現在置かれた状況について「質問に答えるさりげない態度はまさにおどろくべきもの」といった正直さで応え、初対面の相手に対する警戒心を全く示さない。少々意地悪なプライバシーに属する質問についてさえ驚くほどの正直さで答える公爵をロゴージンは「手放しで笑いころげてしま」うが、そうした会話のうちにロゴージンは「なぜだかわからんが、おれはあんたにほれちまった」というようなことになってしまう。この警戒心を持たないということは、私心や下心を持ちあわせていないということを暗示している。彼がペテルブルグで唯一の頼りと思うエパンチン将軍夫人リザベータ・プロコフィエブナとの会見に際し、その長女アレクサンドラは、

ひょっとすると、この公爵はまるっきりおばかさんじゃなくって、かえっとんでもない悪者かもしれなくってよ　（傍点筆者）

とささやき、三女アグラーヤは

あんなふりをするなんて、この人もずい分卑劣ね。それにしても、いったい何をしょうとしているんでしょうね。何かあてにしていることでもあるのかしら？

とささやき返す。それは私心や下心にあふれた常識の側に身を置く者にとっては当然のことで、絶対無私の姿勢など常識的には、何らかの下心から発するポーズでしかないからだ。

また公爵はスイスに居る間、子供達を信頼し、子供達の信頼をも得ていた。しかしそれは、彼が子供を理解し得る大人というのではない。彼はシュネイデル先生の彼自身についての評を述懐している。

私はまったく、完全な子供だ。つまりまったくの子供だ。私は背丈や顔ばかりは大人に似ていても、発育とか精神とか性格とか、ことによったら知能の点においても、決して大人ではなく、たとえ私が六十まで生きながらえても、やはりそのままだろうということを信じて疑わない。

と先生は言ったらしい。

以上のような公爵像は、細部において若干の相違はあるにせよ「お

バカさん」たるガストンが如何に公爵に酷似しているか、その類似性は瞭然と言えよう。

中村光夫は公爵について「人々は彼の非常識を嗤いながらも、同時にその言行の底にほとんど非人間的な無私と、小児のやうな純潔な非力を感じないわけに行かない」（「笑ひの喪失」『文芸』'48・7）と評し、さらに、「一口に云へば彼の滑稽な物腰や言葉が、それが少しも企まれたものでないだけに、一挙に相手の警戒心をといてしまふのです」とも言い、『白痴』とは「ムイシュキン的な人間関係が次第に深められて行く過程と云へませう」と述べている。

このような公爵像を思うとき、

私は汽車に乗って考えました《これから自分は世間へ出ようとしている。ひょっとすると、自分はなんにも知らないかも知れない。それなのに、もう新しい生活がやってきてしまったのだ》とね。私は自分の仕事を正直に、断固として遂行しょうと決心しました。世間へ出れば、きっと退屈で苦しいことが多いでしょう。でも、私は何よりもすべての人びとにたいして丁寧で、正直でありたいと思いました。

という部分は重要だ。かつて公爵はくり返す癲癇の発作のため、ほとんど痴呆に近かった。そして五年ほど前にスイスに行き、治療によって、一応社会生活に適応し得る程度の人格を回復してロシアに帰って来た。現在の彼が二十六、七歳だということは、ロシアで癲癇の発作をくり返すうちに、二十一、二歳頃までに習得し蓄積されるべきロシアの文化・社会・習慣・精神風土といった人格を形成する一切を喪失し、約五年間の治療期間にスイスで獲得した人格によって、ロシアの社交界に帰って来たということになる。「みなさんは私を白痴あつかいにしているけれど、自分はなんといっても賢い人間なのだ。ただみんなはそれをさとっていないだけなんだ」と公爵が思うとき、公爵はロシアを支配する論理とは違った世界に立っている自分には気付いていないということになろう。彼は自分がみんなと少しばかり違うことには気づきながら、ロシアの社会の支配原理とは異なった位置に居ることにまでは気付いていないのだ。このような公爵像は、さきのドストエフスキーの執筆意図にもかかわらず、やはり『ドン・キホーテ』の放心の世界に結びつかざるを得ない。

ドン・キホーテの妄想については周知のとおりであり、今さら述べたてる要もあるまい。が、決して彼は、たまたま風車を巨人に見間違ったわけでなく、ラ・マンチャ県の百姓娘アルドンサ・ロレンソが、たまたまドウルシネーア・デル・トボーソ姫に見えたという訳でもない。日夜読みふけった騎士物語中の勇猛果敢な騎士にひとたび自己を擬し、老いぼれ郷士アロンソ・ケハーナの妄想がドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャを生み出してしまったが最後、騎士キホーテの実在を認め得ぬ者こそ、悪しき幻術師どもにたばかられた不明の者どもということになるのだ。そしてこれと同じ意味で、従者サンチョ・パンザに風車としか見えないのは幻術のためであり、正しい神の庇護を受け得た者のみが、幻術師の魔手から逃れ、風車という外貌を持って現われた巨人という真実を見抜き得るということになるのだ。このことは、ドウルシネーア姫についても同様で、サンチョの前に現われた姫が生ニンニクの匂をさせていたのは、悪しき幻術師が美しい姫を百姓娘に変えてしまったためである以上、キホーテは幻術師から姫を救抜せねばならないのである。

紙幅の関係で詳しく触れ得ないが、右のような常識人の目から見たキホーテの現実離れは、単に物好きの結果たまたまそうなったという

ようなものでなく、キホーテを取り巻く当代社会の腐敗や堕落に対する彼の批判なのであり、少々風変わりではあるにせよ、現実離れの思想に徹することによって、逆に彼は現実と闘っていることは明らかなのだ。

確かに、日常的な世俗空間を疑うことなく生活する者には、キホーテの現実離れは笑いをさそう。しかし世俗世界の常識が正しいとする保障はどこにもあり得ず、単に多数派が常識を構成しているにすぎない場合もあるのだ。

むかしの人たちが《黄金時代》と名づけた遠いむかしこそ、たのしい時代、幸福な世紀じゃ。それはな、われ〳〵この鉄の時代にあまりにも尊ばれる黄金があの幸ある世紀には苦労なく得られたためでなく、そのころ生きていた人たちが《おまえの》《わしの》という二つの言葉を知らなかったからじゃ。あの聖なる時代においては、あらゆるものが共有じゃった。

と、私有や所有の概念を持たなかった時代への憧憬をキホーテは吐露する。しかし彼を取り巻く社会は、すでにイタリア人文主義をとうにくぐり抜け、私の意識の薫染を十二分に受けているのであり、彼の、国家と神とに身命を捧げる清らかな遍歴生活への憧れなどは、当代の人々にとって時代遅れ以外の何ものでもない。

ベルグソンは「笑いは習俗を懲戒する」（同前）と言い、マルセル・パニュルは「笑いは勝利の歌」（岩波新書『笑いについて』鈴木力衛訳'53・4）だと言う。つまりベルグソンによれば、時代遅れのキホーテは現実を直視せず、時代に柔軟に対応し得ていないゆえに滑稽であり、パニョルによれば、笑い手は日常的常識の世界に安住しているゆえにキホーテを劣者と見ることができるのだ。しかし文学の世界はそうした常識の世界に安住することより、むしろ逆に、世俗の常識に反旗を翻してでも真実が見たいといった批評意識に支えられてもいる以上、読者は、時代遅れのキホーテを笑いながら、同時にキホーテの眼に照らされた、読者自身が住む世界を対象化する契機を持つことになろう。

このことはムイシュキン公爵についても同じである。すでに見たように、ドストエフスキーは道化としてのキホーテから道化的側面を取り払いつつ公爵を造形したのだ。それはキホーテの如く、日常的世界を突き抜けた夢想空間に主人公を造形するのではなく、一種の夢想を抱きつつ日常的現実の中に緊密に生活せしめることであったと思われる。そしてこれを可能にさせるものが、公爵の「私は何よりもすべての人びとにたいして丁寧で、正直でありたい」という決心だった。しかし笑いが意図されていないということではピエロ化を一応まぬがれてはいるものの、細部においては、やはり人々の失笑を買わざるを得ないのである。

『白痴』に描かれた背後の社会はまさに、消費に徹した「娼婦だの、将軍だの、高利貸だのが集まる」社交界の、物欲と恋とが同一平面で計量されるような醜悪な世界であり、公爵の友人コーリアが「ここは潔白な人なんかほとんどいなくて、尊敬するに足る者さえいない」「自分たちの以前の道徳を恥ずかしがってる始末ですからねえ。現にモスクワである父親が息子にむかって、金もうけのためには何ものも恐れてはならないと説教したって新聞に書いてありましたよ」と語るような、腐敗しきった末期帝政ロシアの社交界なのだ。

このような社会で、公爵は、自ら「あばずれ女」と卑称するナスターシャ・フィリポブナからの「あたしが生れてはじめて信用することのできたたったひとりのかたですもの」といった信頼を得、次第に「ほとんど非人間的な無私と、小児のやうな純潔な非力」というおよそ世俗からは隔絶した精神（人格）によって、逆に世俗の住人達を「彼

の分身と化して行」（中村光夫）くのである。このようなムイシュキン公爵を一言で言えば「無償の愛」の実践者である。

ふたたび、『おバカさん』の世界に戻ろう。ふとした偶然でガストンは殺し屋遠藤に、山谷のドヤ街に連れ去られる。殺しを手伝わせようというのだ。しかしピストルで脅かされていたとはいえ、逃げ出す隙がなかったわけではない。ただ、遠藤が病苦に苛まれていることを知った途端、逃げ出す意志を半ば喪失するのだ。連れ去られる車の中で恐怖に脅えながら、「逃げるの、逃げるのよ、ガスさん」という巴絵や隆盛の声を宙に聞く。しかし同時に、誰のものともわからない、「目に見えぬ存在」のささやきとして、「信じないの……どんな人間でも信じるつもりではなかったの……」という声を耳にしたりもする。

殺し屋遠藤とは、実は蜩亭老人（占師・元小学校長）の教え子で、勉強も性質も一番で、大学にまで進んだが、二十年後偶然再会した折には「ヤクザの兄貴」分となっていた。「戦争のおかげか真心を失うて人も信ぜん。世も信ぜん、……当世のはやり言葉で虚無的というんじゃろ、そんな青年」になってしまっていたらしい。しかし虚無化した遠藤にも彼なりの言い分はあった。

当時予科練だった彼は空襲で家族を失い、肉親は南方に学徒出陣した兄だけとなった。敗戦後、兄の復員のみを待ち続けたが、その兄は「島の原住民を殺害したという罪で」戦犯となり、無実を訴え続けたが、「ぼくは……もうつまらぬ弁解や釈明はよそうと思う。ちかごろ聖書をさし入れてもらって……それを読んでいる。このウソと偽りにみちた世界にはもう生きたいとは思わない。だが……君だけはぼくの無実を信じてくれ」という手紙を最後に処刑されてしまったのだ。その後遠藤の調べで、兄は上官に罪をなすりつけられていたこと、その上官達は無事復員して、名前を変えて生きていることなどを知り、彼は復讐を誓うとともに、世の一切を信じなくなった。

このような遠藤は、ガストンの「なぜ、あなた人のこと信じないか」という問いかけに「信じないじゃない。信じなくさせられたんでね」と応える。こうした病気の遠藤に対しガストンは「口ではなんとも言えぬ親愛とも友情ともつかぬ」情を抱きはじめ、「ガストンはもっともっと、巧みな言葉をつかって、この遠藤から復讐や憎悪の気持ちをとり除」こうと努め、「ダメ、遠藤さん、ダメ……あなたの病気の辛さのこと、わたしわかります。兄さんの殺されたこと苦しいね。それわかります。しかしダメ。人間のこと憎む、恨む……それ、ゆきづまりでないか」と心の内で訴えかけもするのである。しかし遠藤は、

ひょっとすると、この大男バカのようなふりをしながら、実はすべてを心得ている利口な人間ではないか……そんな気が突然してきたりもするのではあるが、

善人ぶりやがってよ。善意などがまともに通じる今の世の中かい。愛情とか信頼などはみんな便利だから使っている合言葉よ。……おれはもう、そんなものは信じない

と言い捨て、ガストンを殴りつけて行方をくらます。しかしガストンは恐ろしさを感じながらも、第二の仇が住む山形へ遠藤を求めて追って行くのである。

ガストンはあるとき「なにを自分はこの日本に来てやったのだろうか」という自省の念に駆られる。「やったことといえば、人の邪魔になることだけ」「自分は社会に役に立たぬ人間なのだ」「わたしがやったこと……それはただ、人のあとについていくだけ」「自分は遠藤の心をひるがえさせたり、そのすさんだ気持ちをしずめてやることさえ

できない。ただあとをついていくことしか、方法を知らない」（傍点筆者）という思いが去来するのだ。

新聞連載中の読者がこのガストンの悲しみをどのように受け止めていたかについては、後に引く広石謙二の印象である程度想像し得るように思うが、今日の読者は、遠藤周作のその後の『沈黙』（'66・3　新潮社）や『死海のほとり』（'73・6　新潮社）以後の仕事を知っており、この「ついていくことしか、方法を知らない」ガストンの意味が、決して消極的な意味ではなく、また否定的な意味でもないことに気付くはずである。

その後のガストンは、山形で遠藤を発見し、仇小林と山形市をとり巻く山の中の黒い沼の畔にたどりつく。追いつめた小林と向かい合う遠藤は、ふとした隙にピストルを取り落とし、小林の逆襲にあう。小林が打ちおろすシャベルに傷ついた遠藤を身を挺して救ったガストンではあったが、彼自身も傷つき、二人はともに重傷で倒れてしまった。

だがあの時、気絶してから――何十分ののち、ながれる霧がふたたび遠藤のほおをぬらした。かすかに目をあけると空の一角が青く晴れているのが見える。そしてその青空にむかって、一羽のシラサギが真白な羽をひろげながら、飛び去っていくのがうつろな目にうつった。

おぼえているのはこれだけである。おぼえているといっても、この記憶はたしかではなかった。青空と白い翼をひろげたシラサギとは本当にこの目で見たようでもあり、幻覚か、夢であったような気もする。

それからふたたび遠藤は水に頭を半分沈めたまま、気を失ったのである。

「沼のなかには彼が死んだと想像させるものは残っていなかった」にもかかわらず、ガストンはこれ以後、警察にも、山形まで追いかけて来た隆盛や巴絵にも、杳として行方がわからない。隆盛は山形からの帰途、車窓から「出羽山陵をながめながら」「突然この山の頂きちかくをガストンがゆっくりと登っているような気がしてきた」りもする。そして隆盛の夢の中に出て来たガストンは「まるで子供のように一生懸命に岩かどをつかまえ、木の根を握って一歩一歩、山頂にむかって歩いていく。時々足をすべらせてズルズルと転げ」「やがて頂上にたどりついたガストンは」「両手をあげてそれを鳥の羽ばたくように動かし」「紺碧の空に吸いこまれていった」のである。

ガストンの去った後、彼の残して行ったサックの中から一冊のノートが発見された。そこにはたった二行で、「布教神学校に三度も落第した頭のわるいぼくだが……やはり日本に行きたい気持に変りがない」と記されてあった。これがガストン来日の目的だった。

さて、このようなガストンについて武田友寿（『遠藤周作の世界』'71・7　講談社）は、

殺し屋遠藤を改心させることができるのは、《自分の弱さを背負いながら、一生懸命美しく生きよう》と努めたからである。

と言い「『無償の愛』の行為が、ついに悪人の心をときほぐしてゆく――というキリスト教が語り継いできた神話を示そうとしている」と述べてもいる。しかしここで気になるのは、はたして殺し屋遠藤を改心させたと言えるのか、あるいは、そう読むのが作者の意図に沿うものかどうかということである。

広石謙二（『遠藤周作のすべて』'76・12　講談社）は、

最終回が近づくにつれて、私は何かはぐらかされたような気持を味わわされたことを告白しなければならない。山形の沼から忽然と消えてしまったガストンが、シラサギになって空へ舞い上がって行

ったのかも知れないという結末が、あまりにも寓話的すぎるように思われたからである。私はガストンの無償の愛の行為がどういう形で報われるかを期待して読んでいたので、こういう結末が尻切れとんぼのようにしか感じられなかった。

（傍点筆者）

と連載時の印象を語っている。おそらくこの「尻切れとんぼ」的結末のゆえに、武田は自己の願望を「殺し屋遠藤の改心」という形で読み込んだのであろう。

しかし、この白鷺への変身という寓話的処理は、我々にもう一つの白鳥伝説を連想させはすまいか。古事記には倭武尊が「八尋白千鳥」に変身して飛び立ったことになっている。これは一般的には「人間の死後の霊魂が鳥と化して彼岸に行くという信仰」（上田正昭『日本武尊』'60・7　吉川弘文館）ということであるらしいが、折口信夫によれば、白鳥は霊そのものの化身であり、霊を搬ぶ鳥とも信じられ、失神・死亡などの折に、行方をくらましている魂を探し出し連れ帰る「魂ごひ」の対象物と考えられてもいたらしい。古事記に倭武尊の「后及御子等、其の小竹の苅杙に、足踈り破れども、其の痛きを忘れて呪きて追ひたまひき」とみえるのもその故なのだろう。

上代の白鳥観を現代の文学解釈に短絡させようとは思わない。しかし既述のように、夢の中であるとは言え隆盛はガストンが紺碧の空の彼方に飛翔する夢を見たという寓話的処理があり、また他の部分ではガストンをかぐや姫伝説にたとえ「星の世界から地上にやって来たのではないだろうか。そして彼はやがて、星の世界に戻っていく」と隆盛に想像させたりもしており、殺し屋遠藤にとってのガストンの意味を探る際の参考にはなるだろう。

倭武尊の死を悲しむ物語の伝承者達が、尊の魂の表象として八尋白千鳥を造形したものだろうが、それは魂が彼岸に帰って行く姿としてではなく、残された者達の悲願、魂がこの世に再び帰り来ることへの願望（魂ごひ）、尊の魂の永遠性の象徴として白千鳥を描き出したにちがいない。そこで白鷺を見た遠藤の心理ということだが、生死の境にあって、遠藤がかつて余計者、邪魔者として忌避したガストンではあったが、遠藤が心の深いところで抱いていた「永遠の同伴者への願望」が白鷺という表象となったと言えはすまいか。そして、このように作品を読み取るとき、明らかに『おバカさん』はその後の遠藤文学に連続して行くのである。

作品はここまで描かれているだけなのだ。回復した遠藤は再び復讐の殺し屋に立ち戻るかも知れない。「善意などがまともに通る世の中かい。愛情とか信頼など」「おれはもうそんなもなァ信じない」と遠藤は叫んだが、「もう信じない」と言った背後には、かつて信じていた遠藤が居り、信じ得なくなった故の心の痛みを誰よりも強く彼自身が感じていたはずであり、苦しんでもいたはずなのだ。そして、遠藤を直接に救済し得ない苦しみを抱きつつ付いて来た同伴者ガストンを、心の深い部分で認めもし、求めもしていたのである。

確かに日本へ来て以来ガストンは、老野犬ナポレオンさえ救うことが出来ない非力な存在であった。しかし、くり返しくり返し岩山の上に巨石を押し上げ続けたシジフォスのように、ガストンは山頂から飛び去るのではなく、岩山を登り続けるはずなのだ。

ガストンは生きている。彼はまた青い遠い国から、この人間の悲しみを背おうためにノコノコやってくるだろう。

と隆盛は考えている。実は、このように考える者の中にガストンは永遠に息づき続ける存在なのだ。

隆盛はキホーテに付き従う忠実な従者サンチョでもある（隆盛の諺癖

を見よ)。サンチョは主人キホーテの現実離れを見抜きながら、愛と畏敬の念を抱き、心の何処かではキホーテの理想の実現を願ってさえいるのである。また巴絵はムイシュキン公爵の愚かさを笑いながら愛してしまうアグラーヤ・イワーノブナでもあるかも知れない。

ムイシュキン公爵の無償の愛によって誰かが救われたろうか。『白痴』の結末は『おバカさん』以上に悲惨である。ナスターシャの死体を見つめロゴージンと夜を明かした後、公爵はもとの白痴にもどりスイスの病院に帰されるのだが、彼の回復はほとんど絶望的だった。ムイシュキン公爵の自己を滅ぼしてまでの愛の実践も、世俗世界への実功性という点では虚しかった。しかし公爵の存在は本当に無だったのかと言えば、否である。世俗世界への直接的な実功性とは別な次元で、公爵の存在は永遠に息づき続けるに違いない。

『おバカさん』の結末が『白痴』に比べ、白鷺化身や紺碧の大空への飛翔といった、一見明るさを持つのは、当初の目標として定めた読者対象(中・高校生)に向けてのユーモラスで饒舌な文体に呼応しての寓話的処理であったと思われる。しかしこのユーモラスな饒舌の中に、『沈黙』のキチジローの悲しそうな眼やロドリゴの苦悩、さらには沈黙を破って語りかけた「踏むがいい。踏むがいい。」という神の声のモチーフさえ、作者が封じ込んでいるように思えてならない。

付記　本文中に引用した作品は『おバカさん』('79・6　角川文庫)、『白痴』上・下(木村浩訳　'70・1、5　新潮文庫)、『ドン・キホーテ』正・続(永田寛定・高橋正武訳　'78・9～'80・4　岩波文庫)によった。

なお本文中の折口信夫の説は中央公論社版全集中の「民俗史観における他界観念」⑯「萬葉集研究」①「鷹狩りと操り芝居」⑰「恋及び恋歌」⑧を参照した(○内の数字は巻数)。

また、年次の表記は西暦に統一し、一九○○を省略した。

Concerning "O-baka-san" by Shusaku Endo and 'Fool' by Dostoevsky

A beautiful man without reserve, an everlasting miracle (Jesus Christ)

Takashi ASADA

Summary

This article is on the theme (Endo's Christ), re lated to both the Prince in "The Idiot" by Dostevsky, and "Don Quixote" by Cervantes.

Shuhsaku Endo makes "O-baka-san" closely resemble "The Idiot" by Dostoevsky in its structure and details, intentionally or unintentionally.